

今週の水曜日から、大齋節に入ります。

大齋節と、私たち聖公会は呼んでいますが、カトリックや他のプロテスタント教会は、四旬節と呼ぶのが一般的になってきました。四旬とは、40日という意味です。一ヶ月を3つに分けた時、上旬、中旬、下旬と呼んでいるのは、最初の10日間、真ん中の10日間、最後の10日間ということですね。今年の大齋節は、2月14日水曜日から、3月30日・土曜日。イースターの前日まで、数えると46日あります。しかし、日曜日は、イエス様の復活されたお祝いですから、それは数えないで、40日あるわけです。

教会では、この期間を、イエス様が伝道活動に入られる前、40日間荒れ野で修行をされたことと、活動の最後、エルサレムにロバに乗って入られてから、十字架にかけられ、復活されるという1週間の出来事を黙想するために用いられています。昔は、イエス様の復活に合わせて、洗礼を受ける人の洗礼準備期間ということになっていましたが、それを教会員みんなが毎年体験しようということになって、定着して行きました。

でも、苦しい修行というのは、特に食べ物など、ガマンすることが多いので、皆さんよくご存知のように、その前に大騒ぎをして楽しもう、と今年も昨日あたりから、南米などカトリックの強い国では、カーニバルをしています。日本語では、「謝肉祭」。肉に感謝する祭りが行われて、そのあとは、ひっそりとイースターまで過ごすわけです。ある意味で、大齋節に入る前に、今日の福音書、イエス様の変容の出来事を読むのは、それと似たような目的がある、と言えるかもしれません。

今日の福音書には、イエス様の変容の出来事が出てきます。イエス様がエルサレムへ最後の旅をされる前、山に登られたら、イエス様の姿が変わって、その両脇に、旧約聖書を代表するモーセとエリヤが現れて、イエス様と語り合っていた、という話です。この福音書やマタイによる福音書には、その内容が書かれていませんが、ルカによる福音書では「エルサレムでイエス様が遂げようとしている最期（つまり受難）について話し合っていた。」と書かれています。これは、苦しみを受けようとしているイエス様を励ますために、神様がモーセとエリヤを遣わされた、と考えられるのではないかと、思います。

本来、教会はこの出来事を8月6日という、夏に記念するのですが、一年の全く反対の時期に、わざわざ大齋節前の礼拝で読むのには、そんな理由があるのではないのでしょうか。

今日の特祷は、「神よ、あなたはそのひとり子の受難の前に、聖なる山の上でみ子の栄光を現されました。どうか、わたしたちが、信仰によってみ顔をあおぎ見、自分の十字架を負う力を強められ、栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられますように」と祈ります。神様は、イエス様がこれから迎えられる受難という、できたら避けて通りたい、恐ろしい出来事を引き受けるように、励ます必要を感じられたのだらうと思います。

ご自分がエルサレムで人々の罪のために、身代わりに十字架の苦難を受けることを予感しつつも、なかなか決断できない時、神様が励ましてくださったのが、この主イエスの変容という出来事だったのだらうと思います。

以前、子どもの自殺の問題が取り上げられた、テレビを見たことがあります。子どもたちも、つらいことがあって、行き詰まることがしばしばあるらしい。だけど、どうやってそれを乗り越えたか、という質問をされて、「ピアノの練習をしていて、おかあさんに褒められたので、頑張れた。」とか、「つらかったけど、友だちが励ましてくれたから。」などと、答えていました。

イエス様も、父である神様から、励まされた、ということなんだろうと思います。ただ、それではどのような励ましが効果的か、ということになります。

以前、幼児教育をしている友人が、こんなことを言っていました。

最近の子どもたち、特に日本の子どもたちは、外国の子どもたちに比べて、自己評価が低い、ということが問題になっている。すぐにいやなことがあると、落ち込んでしまうらしい。

それで、それに対する対処法として、まず、第一に子どもの言うことを、よく聞いてやることが大事。子どもにもいろんな悩みがあるのに、それをただ、叱ったりしていたのでは、心を閉ざしてしまう。

そして、2番目は、励ますこと。でも、その時、「頑張れ」なんて言うてはいけない、と言うのです。子どもに限らず、主婦だって、夫だって、みんな頑張って生きている。ところが、例えば、夫が仕事から帰ってきたら、部屋が片付いていなかった。「何をやってるんだ。」と叱ったのでは、どうにもならない。主婦も一生懸命頑張って生きている。そんな時、叱ったり、「頑張れ」では、ますます嫌になってしまう。

「頑張れ」ではなく「頑張っているね。」と相手の仕事を評価して、褒める時、相手は喜んで励むようになる、というのです。

それを、エリヤやイエス様にあてはめていいのかどうか、わかりませんが、今日の旧約では、預言者のエリヤが、イスラエルの王様アハブやその妻イゼベルとの戦いに疲れて、シナイ山とも呼ばれる、神の山ホレブにやってきます。

そこで、神様は静かにささやく声で、彼に新しい命令を与えられました。彼の後継者エリシャを任命することなどの仕事です。「また、仕事をさせられるのか、」という気持ちより、神様が励ましてくださって、自分は孤独ではない、ということで喜んで降りていったのでしょう。

また、イエス様は、ご自分の受難と死ということで、大変な悩みがあったのですが、神様は、イエス様がモーセやエリヤと共に、栄光に包まれている幻を示して、イエス様の選んで歩んでおられる道が正しいことを、その幻で励ましておられたのだらうと思うのです。

さて、それでは、イエス様にならって、40日の大斎節を守る私たちは、何をしたらいいのでしょうか。ただ、厳しい修行に努めればいい、というものではありません。励ましが必要ではないでしょうか。

私は、毎日聖書によって励まされる、という習慣をこの大斎節中につけてはどうか、と思います。  
私たちの持っている祈祷書には、558ページから、『第3表 年間聖書日課・詩編』という表が載っています。558ページには「第1年」と書かれ、606ページからは、「第2年」です。3年サイクルの聖餐式の聖書日課が、A年、B年、C年となっていて、今年はB年ですが、年間聖書日課では、今年は「第2年」になります。そのあたりのくわしいことは、513ページの説明を読んでもください。

この第1年と第2年を見ると、旧約聖書に関して言えば、第1年の朝の礼拝で読む箇所を第2年では夕の礼拝で読むことになっており、第1年の夕の礼拝で読むことになっている箇所は第2年の朝の礼拝で読むんですね。今年は第2年ですので、大斎節の第1主日に続く月曜日からは、朝の礼拝の第1日課で、創世記37章の、ヨセフが夢を見たところから始まり、ヨセフは売られてエジプトへ行き、その後、エジプトのイスラエル民族が、モーセによってエジプトを出てゆく直前までを復活前主日前日の土曜日まで読みます。イスラエル民族にとっては苦難の時代ですね。

また、夕の礼拝では、紀元前7世紀から6世紀に活動した預言者エレミヤの苦難の生活を読むことになっています。こちらは大斎節第2主日の翌日の月曜日から復活前主日の前日までですね。

創世記から出エジプトの出来事まで、イスラエル王国ができる前にこの民族が苦勞をした時代に、神様によって励まされたことを学びます。また、エレミヤ書は、イスラエル王国が分裂して北のイスラエル王国が滅ぼされた後、エレミヤは南ユダ王国が滅ぼされるのを目撃した預言者で、彼は多くの苦勞をしたので「涙の預言者」と言われています。

このような聖書の箇所を毎日読むことで、わたしたちは自分たちが孤独ではない、ということ、どんな苦しい時も神様がイスラエル民族や預言者エレミヤを支えて励ましたことを通して学ぶことになるでしょう。

今日の福音書に描かれた変容の出来事の最後、神様からの声は「これはわたしの愛する子。これに聞け」と言いました。

やはり、教会は神様からの声を聞き、イエス様に従って歩む共同体でしょう。

そして、神様が、イエス様を通して語っておられることは、「私はお前たちと一緒にいるよ。インマヌエル」ということですね。

今週の水曜日から始まる大斎節に、そのことを、イスラエルの歴史やエレミヤの証言からも学び、それに励まされて、歩んでいきたいと思います。